

『能 狂言 刀剣乱舞』 制作発表会見レポート

『能 狂言 刀剣乱舞』が、2026年7月28日（火）から29日（水）、8月24日から26日（水）まで東京・国立能楽堂、9月11日（金）から12日（土）まで京都・金剛能楽堂で上演される。

これまでもミュージカルや舞台、そして歌舞伎や、多様なアニメ化など様々なメディアミックス作品の展開がされている、大人気 PC ブラウザ・スマートフォン向けゲーム『刀剣乱舞 ONLINE』（DMM GAMES／NITRO PLUS）が、能狂言化されることが決定した。野村萬斎が監修、大槻文蔵が作詞、亀井広忠が作調、わかぎゑふが演出をそれぞれ担う。第一弾公演として上演されるのは、刀剣男士の髭切・膝丸が登場する「妖蜘蛛編」。膝丸役をシテ方観世流の大槻裕一、髭切役を狂言方泉流の野村裕基がそれぞれ務める。

本作の制作発表会見が5月25日（月）に国立能楽堂で行われ、大槻裕一、野村裕基、『刀剣乱舞 ONLINE』原作プロデューサーで株式会社ニトロプラス代表取締役社長のでじたろうが登壇して公演への思いを語った。



写真左から、おおきい こんのすけ、野村裕基、大槻裕一、でじたろう

まず、本作の企画についての率直な感想を聞かれると、裕基は「世間一般的に、能や狂言という古典芸能に対してどうしても敷居の高さというものがあると思うので、より皆様に親しみやすさを持っていただくという意味でも、こうした新作はよいと思う。刀剣にも伝統的な側面があるので、非常に能狂言との親和性を感じる。個人的に（ニトロプラス所属スタッフが作品の主スタッフとして関わっている）

「PSYCHO-PASS サイコパス」というアニメのファンなのだが、未来が舞台の話で「歴史には敬意を払いなさい」というセリフが出てくる。「刀剣乱舞」も未来から過去を見ている話であるという意味では、似ているところがあるのかなと思う。新作をやるにあたり、我々も歴史に敬意を払いながら表現できたら」と述べた。

裕一は「これまでも新作の能狂言が上演されてきた中で、次は刀剣乱舞を見たい、というお声もたくさんいただいていた。それがまさか実現するとは思っていなかったので驚きもありつつ、本当に嬉しいというのが率直な思い。刀剣乱舞では、刀は単なる武器ではなく、記憶や魂といった時代を超えた思いが詰まっていて、能の持っているテーマ性と近いと感じている」と語った。

でじたろうは「ゲーム、アニメ、漫画等、様々なコンテンツがあるが、そういった表現は伝統芸能から脈々と繋がっていると感じている。「刀剣乱舞」は、刀剣という文化があったからこそできた作品。刀剣は能狂言との親和性が非常に高く、刀剣乱舞の中にも能の物語をモチーフにした刀剣男士もいる。今回新作能狂言という形で上演することになり、とても嬉しく思っている」と思いを述べた。



野村裕基

祖父に人間国宝の野村万作、父に本作の監修も手掛ける萬斎を持つ裕基に、ふたりから学んだ経験が今回の舞台でどのように生かせると思うか、という質問が飛ぶと、裕基は「父は能楽以外の舞台や映像の仕事など、狂言師という枠を超えた活動をしているという意味では、新作能を作る上で技術的に落とし込める部分は非常に多いのではないかと思います。能楽堂の中で上演するからには、能楽に当てはまるものをやらなければいけないと思うが、新たな演出の可能性というものをこれまでも父から学んできた。祖父から習っているのは基本的に古典なので、いかに古典を大事にしながら新作に落とし込むか、という融合をうまくできるかが今回のミッションでもあると思っている」と答えた。



大槻裕一

大槻文蔵の芸養子である裕一にも、師匠である父から学んだことで今回の舞台にどのようなことを生かしてみたいかという質問がされると、裕一は「父は上演が途絶えてしまった能の曲を掘り出して復活させて上演するという、いわゆる復曲能という取り組みをしている。そこで父が大事にしているのが、その演目を原作者がどんな思いで作っているのかということ。私も父から稽古を受けながら、原作者がどういう思いで作っているのかを考えて演じるように言われることが多いので、今回もどういう思いでこの作品が作られたのか、登場人物の深いところを見て考えながら、稽古では父や萬斎さんからたくさん学びたいと思っている」と意気込みを語った。

第一弾となる「妖蜘蛛編」のストーリーについての話しになると、でじたろうは「本作は能の演目「土蜘蛛」がベースになっていて、「刀剣乱舞」を原作としてコミカライズされた「刀剣乱舞 外伝 あやかし譚」も「土蜘蛛」をベースとした話で、そこからインスパイアされた部分もあり、特別協力をお願いした。髭切と膝丸という二振りの刀剣男士が出てきて大活躍するので、ぜひ楽しみにしてほしい」と内容について語った。

髭切と膝丸という兄弟を演じる裕一と裕基のこれまでの共演歴について質問が出ると、裕一が「小学校高学年ぐらいのときに子どもだけを集めて行う能狂言の会があり、裕基さんは萬斎さんと「二人袴」、私は「土蜘蛛」でそれぞれ出演した。同じ演目ではないが、同じ会に出演したのはそれが初めてで、その後は古典をはじめ、新作など様々な公演で一緒に舞台に立たせていただいている」と述べ、裕基は兄弟役であることについて問われると「年齢的には僕の方が下だが、今回は兄役。能に比べて狂言のほうがコミカルな部分があるので、キャラクター的には狂言方が髭切をやって、シテ方が膝丸をやるというのはやりやすいのかもしれない」とキャラクターについても言及した。



でじたろう

少女漫画界を代表する萩尾望都、大和和紀、山岸涼子によるスペシャルコラボイラストについて聞かれると、でじたろうは「ただただびっくりしている。子どもの頃から少女漫画が大好きだったので、描いていただく計画を聞いたときから、完成したものをを見せていただくまで信じられなかった」と語った。裕一は現在、山岸涼子の漫画が原作の能 狂言『日出処の天子』に出演中で、昨年の公演中に「山岸先生が楽屋にいらっしゃった時に、萩尾先生と大和先生もいらして、たまたまお三方がそろっていた。そのときのご縁で今回のビジュアルが実現して私も驚いている」とのエピソードを明かした。

最後に舞台への意気込みを聞かれると、裕基は「国立能楽堂で連日公演をするということは、かなり異例なことだと聞いている。初めて能楽を見る方も、普段から能楽を見ている方も、それぞれの楽しみ方をして欲しい。能舞台は非常にシンプルな劇場構造になっているので、想像力を膨らませながら見てもらえれば」、裕一は「本作が発表になってから、たくさんの反響をいただいている、嬉しい反面プレッシャーもある。能狂言と刀剣乱舞が舞台上でどのようにマッチするのか、そしてミックスされるのか、私自身楽しみで仕方がない。闇や気配や静かさ、といったものは能の得意分野なので、そういうところも含めた緊張感というものを披露できればと思う。裕基さんと共に作品に真摯に向き合って稽古を重ね、素晴らしいものを皆様にお届けできるように頑張りたい」とそれぞれ思いを述べた。

でじたろうからは「能狂言化ということで、刀剣乱舞、そして刀剣男士たちの魅力というものが、どんどん重なっていくようなイメージでとらえている。今回の演目をきっかけに、観た方の興味が能狂言にも広がればと思う。能狂言の物語を吸収した後、また刀剣乱舞の世界で刀剣男士たちと共に物語を紡いでいただけたら」と期待の言葉が語られた。



写真左から、でじたろう、大槻裕一、野村裕基、吉田尚記アナウンサー（司会）

フォトセッションには『刀剣乱舞 ONLINE』の 宣伝隊長をつとめる“おっきい こんのすけ”も登場して華を添え、和やかな空気の中、制作発表は終了した。



写真左から、でじたろう、野村裕基、おっきい こんのすけ、大槻裕一、吉田尚記アナウンサー（司会）